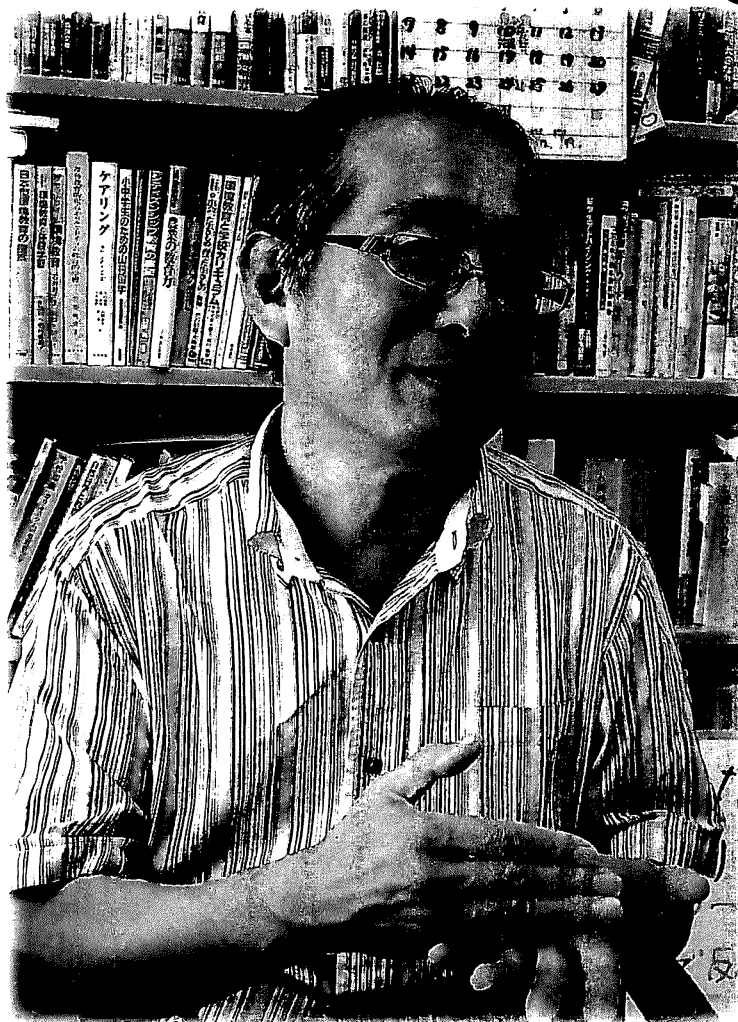


さいたまここに人あり



自然豊かな
「子どもたちの楽園」を守りたい

「トトロのふるさと基金」理事長

安藤 聡彦さん

訪れる人にどこか懐かしさを感じさせる「雑木林」「里山」の風景が残る狭山丘陵。安藤聡彦さんは、この豊かな自然環境を守るナショナル・トラスト運動を展開する公益財団法人「トトロのふるさと基金」で理事長をつとめています。埼玉大学教育学部教授として多忙な日々を送りながら、ライフワークとなった活動に取り組む安藤さんに、お話を伺いました。

「公害問題と教育」を学んだ学生時代

埼玉県西部に広がる狭山丘陵は、宮崎駿監督の大ヒット映画「となりのトトロ」の舞台のモデルとなったことで知られています。公益財団法人「トトロのふるさと基金」は、20年以上にわたり、この地域の豊かな自然環境と文化財等を保全す



トトロの森 (3号地)

る取り組みを行っています。

活動にかかわるようになった原点は、学生時代の経験にあります。1978年に大学に入学した私は、戦後教育史ゼミで、公害問題と教育というテーマに出会いました。近代の負の側面である公害に対し、教育はどう向き合うのか。指導教官の藤岡貞彦先生の下でそんなことを考えるようになりました。「トトロのふるさと基金」と並び、私のもう一つのライ

狭山丘陵のナショナル・トラスト運動

そんな私が、狭山丘陵の地でナショナル・トラストを行う「トトロのふるさと基金」の中心メンバーとはじめて会話をしたのは、1990年代の初頭、「子育て・文化協同全国交流研究会」でした。実は日本でも、1960年代から70年代を通じて、神奈川県鎌倉市や和歌山の天神崎、北海道の知床などで先駆的なナショナル・トラスト運動が行われてき

フワークとなった環境教育研究も、この時期にはじめたものです。

こうした関心のもと、19世紀の産業革命期以来、環境問題に対する取り組みを蓄積してきたイギリスの研究を進めていきました。その中で住民がみずから土地を買い取り、環境保全をはかるナショナル・トラストという運動を知ったんです。当時、日本ではようやく環境教育という概念が生まれたころでした。しかしイギリスのナショナル・トラスト運動の中には、百年前からすでにしっかりと子どもたちへの教育が位置づけられている。その点に感銘を受けました。

た経緯があります。ただしそのほとんどは、歴史遺産や「大自然」の景勝地を守るとい性格のものでした。それだけに、首都圏郊外の狭山丘陵の地でナショナル・トラストを行うという構想に、新鮮な驚きと感動を覚えました。

1998年、「トトロのふるさと基金」が財団法人化された翌年、埼玉大学に赴任することになった縁も一つのきっかけ

になり、次第にこの運動に深くかわるようになりました。狭山丘陵に関する小中学校向けの学習教材づくりのお手伝いなどを通じて、地道に活動を続けてこ

れたメンバー、ボランティアの皆さんから、多くのことを学びました。
2007年からは二代目理事長を拝命し、今日に至っています。

「トトロのふるさと基金」の活動

現在の「トトロのふるさと基金」について、簡単にご説明します。

活動の中心は、広く市民から基金に寄せられた寄付金を原資に、埼玉・東京の5市1町にわたる狭山丘陵の土地を取得し、その保存・管理をはかることです。取得した土地の多くは、人間が手入れをし、地域社会の中で調和のとれた景観を形づくってきた歴史を持つ「雑木林」「里山」です。取得済みの土地は20か所、総面積は約3ヘクタールに及びます。

そもそも「トトロのふるさと基金」の源流となる運動は、高度成長からバブルに至る時期の大規模乱開発に抗するという問題意識からスタートしました。しかし、その後の長引く不況、不動産価格の低下で、状況は大きく変化しています。

かつては、「ディベロッパに売るのはなく、われわれに売って欲しい」と

地権者にお願いをするのが常でした。ところが最近では、むしろ地権者から「このまま土地を保有していても固定資産税や相続税が払えない。かといって売ってもさほどの資産にならない。愛着のある土地なので、ぜひそちらで管理を引き受けてほしい」といったご相談を受けることが多くなりました。実際、前述した20か所のうち3か所は、地権者から無償で譲渡を受けたものです。

取得した土地の活用としては、市民が豊かな環境に親しみ、また自然や歴史の学習を行う際の支援を行っています。具体的には、ガイド付き散策の会、親子自然観察の催し、里山体験講座等を実施したり、小中学校の「総合的な学習の時間」の授業へのサポートを展開したりしています。これらに関しては、埼玉県より「狭山丘陵いきものふれあいの里センター」

の指定管理者を受託し、同センターのプログラムとして実施するという形をとっています。

ちなみに法人の本部としている「クロスケの家」は、文化庁の登録有形文化財指定を受けた築百年を超える古民家です。全国でも珍しい伝統的な茶工場の様子を伝えるこの建屋も、ミュージアム的な機能を果たす場としてワークショップなどに活用しています。



「クロスケの家」

多くの人をひきつける「雑木林」の魅力

気がつけば、あっという間に十数年がたつてしまいました。「トトロのふるさと基金」が多くの人を巻き込んでこまめ成長してこれたのには、いくつかの理由があると感じています。

まずあげられるのは、なんといっても、狭山丘陵という土地自体が持つ魅力です。はじめてトトロのふるさとを訪れた方皆さん、「東京のすぐそばにこんな美しい自然があるとは知らなかった」とおっしゃいます。木漏れ日の優しさ、吹き抜ける風のさわやかさなどを味わうと、理屈ではなく、誰もがこの森が好きになってしまふんです。

そして、その体験でつながった人たちが、会員になったり、ボランティアに参加したりして、私たちの仲間になってくださる、そうした輪の広がりが、「トトロのふるさと基金」の最大の財産であり、活動の成果であると思います。

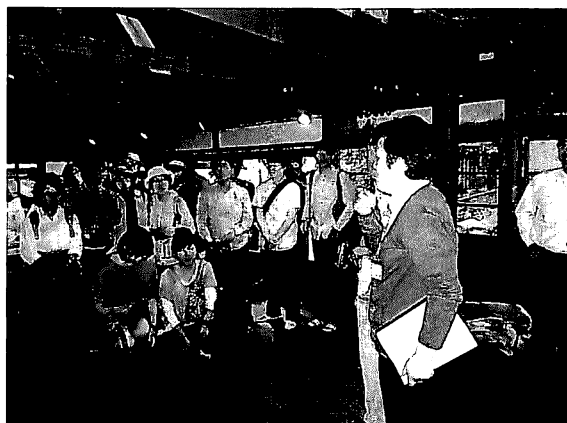
もう一つ、宮崎駿監督をはじめスタジオジブリ関係者のご好意で、「トトロ」の名前を使わせていただいていること

も、大きな強みです。もともと、「トトロのふるさと基金」立ち上げメンバーと宮崎監督の奥様が知り合いだったことから、「トトロ」の冠をお借りすることができています。現実問題として、多くの寄付金を集め、活動を維持拡大する上で、「トトロ」のブランドはとても重要な力になったと感じています。

以前、宮崎監督に、映画「となりのトトロ」のテーマは何ですか、と質問したことがあります。監督は、「私があの作品で描きたかったのは『子どもの樂園』です」と明快に答えて下さいました。この言葉は、私たちが活動を進める上で、重要な示唆を与えてくださるものです。何を目指して狭山丘陵の自然や文化を

運動の担い手を増やしていきたい

最後に、「トトロのふるさと基金」の活動が抱えているいくつかの課題についてもお話をさせていただきます。



守り発展させていくのか。その中心には、「子どもたちに、無我夢中でわくわくした時間を過ごせる場を与えたい」という思いがある。私は、いつもこの視点を忘れないようにしたいと考えています。

まず一つは、土地の管理の問題です。伸びすぎた木を切ったり、枝打ちをしたり、下草を刈ったりして、景観のいい雑



木林の状態を維持していくには、かなりのマンパワーが必要です。ボランティアの皆さんのお力を借りるのにも限界がありますので、この点は常に悩みの種です。恒久的な自然や文化財の保存活動を可能にする、財政的な支えをどう得ていくかも重要な課題です。今後は企業の社会貢献という見地からの寄付をいかに集めるか、そのための枠組みづくりにも力を入れる必要があります。

土地の取得に関する引き合いが増える

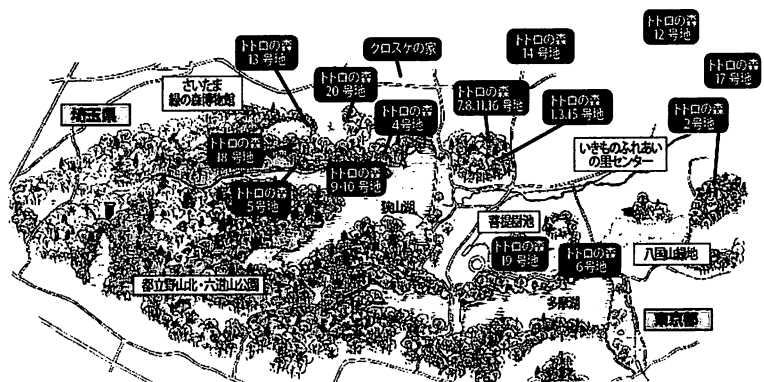
につれ浮上してきた問題もあります。それは、取得候補地に、ゴミや廃棄物が埋まっているリスクです。不法投棄などでできたゴミの山も、数十年経つとその上に草木が生え、一見豊かな緑の地に見えることがあります。しかし実際には、人間の健康に悪影響を与える有害物質に汚染された土地であつたりするわけです。

こうした状況を踏まえ、行政とも意見交換をしながら、狭山丘陵という広大な地域全体の自然をどう守るかというマスタープランを作成していくことも、今後のテーマだと考えています。

もう一つ、運動の中心となる担い手はどう育てていくかという課題も、非常に重要になってきています。

狭山丘陵というフィールドで、環境保護と環境教育をリンクさせていく。「トロロのふるさと基金」は、このことを活動の大きな柱の一つとしてきました。これまでその中で大きな役割を果たしてきた下さつたのは、地元埼玉の教員の皆さんでした。

その伝統を継承するためにも、野外に出て、子どもたちが自然とかかわる豊かな学びの機会をつくってくださるリーダーの先生方を、もっと増やしていきたい



い。私自身、大学で教員養成に携わる立場にありますので、責任の重さを痛感しています。この雑誌をお読みの先生方のお力も、ぜひお借りできたらと考えています。ご関心をお持ちの方がいらっしやいましたら、ご一報いただけたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。